

家其形雖不ノへ、而其心ノへ也、所謂意馬坐馳、可愧汝之靜而無心乎、動者汝之用也、靜者汝之體也、軒中已靜、主人亦靜、與汝相對而逾靜矣、唯見簡編之蝨、蟲之歧行汝邊而ノへ耳也、魯齋主人奇其形、感其靜、而爲之說、壬寅孟冬

〔好色二代男五〕彼岸參りの女不思議

重箱に飯入れて、あへ物一つ、瓢箪の酒も樂みは同じ、

〔燭夜文庫〕蝸廬記

山と山つみにはあらず、酒屋遠くて常に瓢のまろびがちなるこそ侘しけれ、

〔堀川後度狂歌集三〕八月十五夜

六柯園猿人

照月に尻を向ても憎からじさかさにくつす酒の瓢箪

〔後撰夷曲集八〕人のうづくまれるかたまたる酒瓢箪を、心戒と名付てよめる、

夕顔となりこそさがれ上人は佛の種や蒔そんじけん

長嘯子

〔我おもしろ下〕瓢箪吸筒の銘

達磨はわるい酒、ねかせばおきる、起してもねたがるは此瓢たん、性は善也、生は千なりとも、本來

空ふくにごくく、これ極樂、

〔鶉衣拾遺下〕瓢長者傳

巴陵舎に一ツの瓢あり、其かたちをかしく曲れり、曲る物は全きとか、久しく爰につかへて許由がにくみをかうふらず、鉢叩にも奪はれず、あるじも中流に舟を失はねど、常に愛して千金の價に思へりとぞ、むかし不之庵の翁は是を褒稱して、長者瓢の三字を銘せしより、頓て此名を打かへして、みづから瓢長者とは名乗ける也、長者の自稱必しも其故のみにもあらず、此瓢に不思議ありて、酒を出す事綿々として不止、是仙術にも幻術にもあらず、只一婢に阮宣が杖を持せて、一